

この少女を見よ

ひと皆が自分のため、またわが子のために良い環境を必死に願っている。

音も聞こえずものも言えない両親に育てられた小山ゆかりさんの場合は、その逆の決定的環境といえよう。小学校に入っても片言しか言えない言葉の遅れ。友もなく「環境をうらみ、両親を責める」日日であった。ある日の学級参観は子供心をずたずたにした。思いもかけず母が手話通訳を連れて現れ、二人の手話姿がクラスの空気を異様にしてしまった。

「来るなら一人で来ればいいのに。黙って立っておれば、だれも分かりやしない。」その日を境に母への憎悪と反抗は激しくなっていく。

高校入試前、母は手ぶり身ぶりで思いのたけをわが子に伝える。「自分たちは耳が不自由なため人様からずいぶん助けてもらっている。ゆかりは世の中の役に立つことをして恩返しをしてくれ」と。

娘は「わが耳を疑った。人をうらみ、世の中に怒りを抱いているとばかり思ってい

たのに」ゆかりさんは目が覚めた。「母の教えを守り私は看護婦の道を志す。父と母に代わって精いっぱい働こう」まさに立志である。

ゆかりさんのこれらの言葉は、今年の県高校弁論大会で発表した文からの数節である。

良い環境とは何だろう。ゆかりさんの懸命の歩みはそれに見事な解答をしている。ひとが精いっぱい生きている場所であること。不幸な環境に負けない魂の輝き。そして、「ありがとう」とお返しを伴う行動。この三つは高貴なる魂のみが歩む道ではある。(ゆかりさん・柳ヶ浦高校三年の発表文希望は小生まで)

(一九九一年十一月十一日)